

kumamoto artpolis  
news **31**



●発行—くまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）  
〒862-8570 熊本市水前寺6-18-1  
TEL 096-333-2537 FAX096-384-9820  
<http://www.pref.kumamoto.jp/traffic/artpolis/index.html>

●撮影—清島靖彦、宮井正樹、くまもとアートポリス事務局、中央印刷紙工（株）

# kumamoto artpolis news **31**

特集 **アートポリス新世紀**

## 新コミッショナー 伊東豊雄氏に聞く

シンポジウム「KAPの新提言」



- くまもとアートポリス設計競技2005
- わたしたちとアートポリス
- クローズアップ「建築ガイド」
- TOPICS
- くまもとアートポリス推進賞
- 受賞紹介

# 新コミッショナー 伊東豊雄氏

New Century of Kumamoto Artpolis

# に聞く

後世に残り得る優れた建造物を造り、質の高い生活環境を創造するとともに、地域文化の向上を図ることを目的に1988年にスタートした「くまもとアートポリス事業」。17年が経過した2005年には、建築家の伊東豊雄氏が3代目コミッショナーに就任、新生KAP(くまもとアートポリス)の新たな取り組みが始まった。

## 熊本を若手建築家育成の場に 造り、学び、育つ

### 「考えるアートポリス」へ

—コミッショナーに就任しての抱負をお聞かせください

今までアートポリスというと、外から建築家がやってきて建築を造る、受け入れるものという印象がありました。これからは、第3期アートポリスのテーマ「学びつつ創る、創りつつ育む一次代を考えるアートポリス」という言葉にもあるように、熊本を若い建築家が育っていく場にしたいと考えています。熊本を舞台に、受信の場から発信の場へ変えていければと願っています。

バイスコミッショナーを務めていた間、熊本の若い建築家はあまり元気がないという印象を受けました。もっと熊本から、元気はつらつとした主張をする建築家に登場してほしいと切望しています。そのための土壌づくりも考えています。

—最初のプロジェクト「次世代モクバン」の設計競技が行われました。

熊本は木材が県の産業として大きな意味を持っているので、木造建築が中心となって新しいアートポリスが発展していくような課題を考えました。

造られるものは小さなものですが、小さなものであるがゆえの素晴らしさというものを痛感しました。大きなものだと新しい人は入りにくいとこ

ろがありますが、小さなものならば学生でもできるものとなります。新しいテーマにぴったり合ったものになったと思います。

最終審査には熊本の学生2チームも残りました。全国的に活躍する若手建築家も応募していた中で、熊本の学生が最終審査にまで残ったのは、素晴らしいことだと思います。参加者からもよい勉強になったという感想が返ってきました。「これが木造なの？」と驚くような提案がたくさんあり、面白く質の高いコンペだったと思います。

最優秀賞が決まって終わりというのではなく、大胆な案を選んだのでなおのこと、利用者に喜んでもらえるものに育てるという役割があります。ワークショップを開くなど、継続してサポートしていくことも、アートポリスの役割のひとつです。大胆な案を選んだのでなおのこと、利用者に喜んでもらえるものに育て、より素晴らしい案が実現するようにしたいですね。

—今後の展望をお聞かせください。

「次世代モクバン」のような小さなプロジェクトで十分なので、いろいろなアートポリスのプロジェクトが増えればと思います。

早急にやりたいこととしては、海外、特に近隣のアジアからアートポリスの建築物を見に来る人がたくさんいますが、そういう人に建物の意味を伝えられるボランティアがいてほしいと希望しています。

ボランティアには単に集まってもらうのではなく、

シンポジウムや小さなレクチャーを重ね、面白いと思ってもらいガイドになっていくのが理想的です。若い学生や主婦の方などに、ぜひ参加してほしいと思っています。その結果、アートポリスについて、ガイドブックのようにまとめていくことができると思います。造るだけがアートポリスではないということを知ってほしいですね。

熊本は木材が大きな産業であり、東京から来ると、森、林、山、という自然に圧倒されます。その美しさをどのように、造るといって、発信するということにおいてアピールできるか、その間にアートポリスがあると考えています。

従来のアートポリスで造られた建築は世界に誇れるものですが、現代建築としての素晴らしさと熊本の地域とが関わってこなかったため、必ずしも熊本の人においては、意義深いものではなかったと思います。地域というものを、どんな風に建築としてアピールできるかに目的が移りつつあるのです。アートポリスは全国どこにもないもので、地域としての建築を高めるよいベースになりうると思います。

最終的には、熊本が美しい町、素晴らしい町になっていくことが、アートポリスの最大の役割です。今までは、外からの建築家を推薦し、新しい公共施設をデザインすることが中心でしたが、造るといってだけでなく、学んでいく、ここから育てていく、「みんなで考えるアートポリス」にすることが、造ること以上に重要です。



くまもとアートポリス コミッショナー

●建築家 伊東豊雄 ITO TOYO

1965年 東京大学工学部建築学科卒業 / 1965~69年 菊竹清訓建築設計事務所 / 1971年 URBOT設立 / 1979年 伊東豊雄建築設計事務所にて名称変更  
[作品] 八代市立博物館・未来の森ミュージアム / 大館樹海ドームパーク / せんだいメディアテーク / まつもと市民芸術館 / TOD'S表参道ビル / アイランドシティ中央公園中核施設ぐりんぐりん / MIKIMOTO Ginza2 ほか  
[受賞] 日本建築学会賞(作品)(1985年・2003年) / 第33回毎日芸術賞(1992年) / 芸術選奨文部大臣賞(1997年) / 日本芸術院賞(1999年) / ヴェネツィア・ビエンナーレ金獅子賞(2002年) / RIBA(王立英国建築家協会)ゴールドメダル(2006年) ほか

# アートポリス新世紀の スタートを切るシンポジウム

伊東豊雄コミッショナーのもと、新たなスタートを切った第3期くまもとアートポリス。  
桂英昭氏、末廣香織氏、曾我部昌史氏の3人のアドバイザーが任命され、  
コミッショナーとともに、アートポリスの推進に取り組む。  
8月6日に行われたシンポジウムでは、「KAPの新提言」と題し、  
伊東コミッショナーと3人のアドバイザーが、アートポリスについて語った。

ア  
ド  
バ  
イ  
ザ  
ー



桂 英昭 Katsura Hideaki

1952年福岡県生まれ/  
熊本大学工学部助教授  
作品=木魂館、湯前まんが美術館・  
公民館 ほか



末廣 香織 Suehiro Kaoru

1961年大分県生まれ/  
九州大学助教授  
作品=小国町立北里小学校屋内運動場、  
西有田町タウンセンター ほか



曾我部 昌史 Sogabe Masashi

1962年福岡県生まれ/  
東京芸術大学助教授  
作品=八代市立高田あけぼの保育園、  
愛知万博トヨタグループパビリオン ほか



伊東氏は「ものを造っていくことがアートポリスの大前提。文化としての建築を造るという一貫した精神を継承していかなければならない。その上で新たに、熊本の木材を使ったプロジェクトを行い、若い建築家を熊本から輩出したいと希望している」と語り、「学びつつ創る、創りつつ育む一次代を考えるアートポリス」という新たなテーマを掲げた。  
地元熊本で立ち上げの時からアートポリスに関わってきた桂氏は、「建築が面白いのは、似たよう



熊本市現代美術館において(コーディネーター南島館長)

なものばかりにらず、いろいろな建築が存在するところで、その面白さを多くの人と共有していきたい。楽しい建築を考えること、造ること、使う人を一体化できるような新しい企画をやっていききたい」と語る。

木造で小国の北里小学校の体育館を造った末廣氏は、熊本の木造文化を発展させていければと願う。「熊本のアートポリスは、九州の誇りであり、建築界の誇りでもある。非常に高いレベルの建物が多く、重要な資産として活用し、未来につなげていけるように役に立ちたい」と言う。

伊東事務所で八代市立博物館の建築に携わり、八代の保育園を設計するなど、アートポリスとの関わりが深い曾我部氏は、「新しい建築の考え方や造り方がすべて熊本にあるという時代が来てほしい。世界の建築を学んでいる人たちに、熊本で議論されていることが一番面白いと思ってもらえるような状態になれば」と語った。

最初のプロジェクトとして、木造バンガロー「次

世代モクバン」の設計競技を行うことが発表された。審査の選考過程や実施設計を公開し、論議を行いながら設計を作り上げ、情報発信をしていく考えだ。

桂氏は、「以前は嫌いだっただアートポリスという名称だが、既成のものを突き抜ける希望や意気込みをアートと呼べるのではないかと語る。「今まで以上に、情報発信に力を入れていきたい。そのためにもアートポリスの成果をまとめ、本などの形で残していくことを考えたい」と末廣氏。いろいろなタイプの建築家の作品がそろっている熊本は、これからの建築を議論する場にふさわしい。「若い人たちに建物だけでなく、考え方や造り方など何かを生み出すことを期待したい、そのための助力は惜しまない」と曾我部氏は言う。

「世界のどこでも同じ建築を造ることを目標にしてきた20世紀型の建築に対し、木造建築のほうが今までにない面白いものを造れるかもしれない」と伊東氏。熊本の木材を使った小さなプロジェクトから、新生KAPの新たな一歩が始まる。

熊本から新たな木造文化の発信を

新生KAPが企画する設計競技の第一弾として、「次世代モクバン」コンペティションが開催された。木造バンガローという小さなプロジェクトを通じて、熊本から世界へ羽ばたく建築家の登場が期待される。



70名が参加した現地説明会

「次世代モクバン」現地説明会を開催

くまもとアートポリス設計競技2005として、8月6日に、コンペティションの開催が発表された。課題は「次世代モクバン」(新鮮な空間とフォルムを持つ木造バンガロー)で、球泉洞休暇村の一角に木造バンガローを計画するもの。応募は35歳以下、資格は問わない。球磨川に面し、球泉洞森林館を臨む場所に、バンガローという限られた木造建築をどのような形で提案できるのかが問われた。

9月10日には、球磨村森林組合休暇村の敷地で約70名の参加者による現地説明会を開催した。説明会の冒頭には、「本当に実現できるか不安があっても大胆に提案し



二次審査は公開で行われた



最優秀賞は伊東コミッショナーから授与



一次審査には259点が集まった

てください。後に自分の建築人生の最もエキサイティングな瞬間であった、と思われるような生き生きとした提案を期待しています」という伊東コミッショナーのコメントを発表。熊本県内をはじめ全国各地から、16歳から35歳まで幅広い層の参加があり、犬童球磨村森林組合長や桂、曾我部両アドバイザーへ、熱心な質問が行われた。

10月25日の締め切りまでに、海外からの3点を含む259点の応募があった。内、熊本県内からは37点。10月31日、審査委員5名による厳正な1次審査の結果、11案が選出された。

公開審査で最優秀賞を決定

11月20日、熊本市現代美術館ホームギャラリーにて、「熱きU35の論戦」と題し、第2次審査が公開された。全応募作品が会場に展示され、立ち見が出るほどの盛況となった。公開審査では、1次審査合格者から、各5分のプレゼンテーションが行われた。それぞれ、写真やCG、ビデオなどを用い、工夫を凝らしたプレゼンテーションとなった。その後、審査委員から、1次審査合格者へ、インタビュー形式による質疑応答が行われた。

休憩を挟んで、審査委員による公開協議に移った。各自、3作品ずつ推薦し、協議を行った後、5作品に絞られた。審査委員から再度質問が行われ、検討の結果、「Final Wooden House」が最優秀作品に選出された。最優秀賞と優秀賞3点が決定し、7点到球磨村森林組合長賞が贈られた。

閉会后、美術館内の喫茶室に移り、審査委員を囲んで和やかなパーティーが行われた。最優秀賞の藤本さんが「うれしいと同時に責任を感じています。皆さんに助けをもらいながら問題を解決していきたいと思います」とあいさつした。

アートポリスを新しい建築創造の場に



伊東 豊雄  
くまもとアートポリス  
コミッショナー

「次世代モクバン」は小さなプロジェクトですが、小さいがゆえのエネルギーを持っています。「学びつつ創る、創りつつ育む一次代を考えるアートポリス」というテーマにあるように、熊本から、若い建築家による木造の建築を生み出したいというのが願いです。

アートポリスに関わる者としては、ここから新しい建築が発信されていく、造られていく、創造されていく、そういう場にしていきたいという気持ちを感じていただければ大変幸せだと思います。犬童組合長には我々の思いを意気を感じていただき、感謝しております。

アートポリスで山村の活性化を



犬童 義一  
球磨村森林組合  
組合長

設計者と地元の大工さん、球磨村森林組合の三者で組んで、建設に取り組むことを考えています。新しい工法が生まれたら、技術取得にもなります。みんなが泊まりたい、というバンガローになるよう期待します。

アートポリスによって木材の需要が増え、観光につながれば、山村の暮らしが潤います。山林から人が出て行くと、森の手入れをする人がいなくなり、川下まで荒れてしまいます。山林を残すことは、川や海を守ることにもつながるのです。

くまもとアートポリス設計競技2005 最優秀賞

愛されるバンガローを目指して



設計者/藤本 杜介さん(34歳)  
作品名/Final Wooden House  
所 属/藤本杜介建築設計事務所  
(東京都)

設計趣旨説明(概要)  
柱、梁、筋交いといった木の用途が未分化である段階までさかのぼり、ただひとつの使い方をすることにより、分断された多様な要素が渾然一体となった原型的でいながら新しい建築空間をもつ「究極の木造建築」を提案する。

バンガローは小さいけれども、木造という基本的な建築をどのように解釈するかが面白く、挑戦のしがいがありました。木のかたまり、動物の巣、従来とは全く違う、大きな材木でできた地形のような建物を、イメージして設計しました。せいっぱいやったことを理解し、選んでいただきたいと思います。

ワークショップを通して、工法についてなど、問題点を建設的に解決していきたいと考えています。妥協ではなく、創造的な解決をしたいです。伊東先生はじめ審査員の先生方、地元の方たちと協力し、楽しさを理解してもらい、長い年月愛されるようなものになりたいと思っています。



## 熊本のアートポリスは世界でも貴重なプロジェクトです

アリ・セリグマン (Ari Seligmann) さん

国際交流基金フェロー・東京大学生産技術研究所外国協力研究員  
UCLA 建築・都市計画学部博士課程

10年前、テキサス州ライス大学で建築学を学んでいたとき、建築雑誌で熊本のアートポリスの記事を目にし、興味を引かれ、実物を見るべく熊本を訪問したのがアートポリスとの出会いです。そのときは八代市

立博物館、三角ターミナル、北署、帯山団地など11カ所を見学し、「いろいろなプロジェクトがあるのだなー」と驚きました。それ以来、幾度となく熊本を訪れ、現在は、東京大学の生産技術研究所外国協力員としてアートポリスの調査、研究を続けています。

世界中には、さまざまな公共建築プログラムがありますが、どれもあまり長くは続いていないようです。その点、熊本のアートポリスは政治や経済が変化しても持続していて貴重だと思います。「コミッショナー」、「アドバイザー」の存在や行政と連結して行われるシステムがユニークですし、外から見れば、公的に建築文化をサポートしてくれるというのがうらやましいですね。アートポリスによって、地域の伝統財産や都市計画を話し合う場が生まれ、建築についての教育プログラムも実現されていると思います。その意味でアートポリスは熊本の建築文化の刺激になっていると思いますね。

しかし、一つ残念なのは、その土地に住んでいる人々があまりアートポリスの価値を認識していないように感じることです。アートポリスを地域の人々が自分たちの文化財として、守り育てていくためにも、もっと広い範囲をターゲットにしたシンポジウムや建築ツアーなどを行うことが必要なのではないでしょうか。アートポリスは素晴らしいプロジェクトですから今後も、長く続いて、成功して欲しいですね。

世界には、さまざまな公共建築プログラムがありますが、どれもあまり長くは続いていないようです。その点、熊本のアートポリスは政治や経済が変化しても持続していて貴重だと思います。「コミッショナー」、「アドバイザー」の存在や行政と連結して行

われるシステムがユニークですし、外から見れば、公的に建築文化をサポートしてくれるというのがうらやましいですね。アートポリスによって、地域の伝統財産や都市計画を話し合う場が生まれ、建築についての教育プログラムも実現されていると思います。その意味でアートポリスは熊本の建築文化の刺激になっていると思いますね。

# わたしたちと

## 出会い、学び、生活して18年



## 地域ぐるみで施設の活性化に取り組みたい

鳴瀬 信一さん

「ひびき」美里町文化交流センター 運営委員

美里町(当時砥用町)文化交流センター「ひびき」は、計画にあたり町民参加のワークショップが開催されました。私は、そのワークショップに参加して計画段階からこの建物に関わった一人です。オープン2年目以降、町の事業費が削られ、民間での利用を高めようと「ひびきの森大学」を結成しました。年に5回程度、いろいろな分野の方を講師に招いて講演会を行うもので、希望者は年会費を払うと聴講できます。しかし、なかなか著名な講師の方を招くことができず、会員を集めるのも大変です。

「砥用太鼓」の代表も務めていて、週1回リハーサル室で太鼓の練習を行っています。この施設ができたおかげで騒音の心配をしないで練習ができてありがたいですね。ワークショップの時にお願いして、太鼓の保管庫も造ってもらいました。保管庫の壁がコンクリートの打ちっばなしなので、梅雨どきは除湿が大変ですが、また、日本で初めて取り入れたという領域冷暖房も、部屋が暖まるのに数時間かかるので、小さなリハーサル室だけを利用する時には意外に不便です。こういうことは、ワークショップの段階で気づかない。建物を造る人には、利用者の立場や地域の特性などを考慮してほしいと思います。

新年度からNPO法人として、施設の運営を町から切り離すことが決定しています。せっかく立派な施設を造ったのだから、どう上手に活用していくか、有意義に使えるように皆で考えることが必要だと思います。例えば、現在ほとんど利用されていない図書館やパソコン教室は、ボランティアで管理者を募るなどして、町民がもっと使えるようにするとか。

どちらにしても、わずか数年で結果は出ません。まだ一度もこの施設を訪れたことのない町民もたくさんいるので、10年、20年たった時にやっと先が見えてくると思います。焦らず、気長に、自分にできることを皆で考え、できることからやっていきたい。そして、子どもたちが大人になった時、「あってよかった」と思える施設になっていけばいいですね。



平成16年4月に入居して、もうすぐ約2年になります。2階建ての建物の1階部分と2階部分に、それぞれ1世帯ずつ入居、私が住んでいるのは1階部分で2LDKです。建物の特徴は、遮音性を確保するため、1階部分は鉄筋ですが、2階部分は木造であること。おかげで、2階の物音はあまり聞こえません。建物全体に地元特産の小国杉をふんだんに使用することで、木の温もりが感じられる造りになっています。



## 学生も参加できるアートポリスに

岩田 紘明さん

熊本県立大学環境共生学部環境共生学科居住環境学専攻4年

大学では環境と共生していくための「健やかな住まい」について学び研究しており、建築についての見聞を広げる活動の一環で、アートポリスについても勉強しました。

大学時代の4年間で、多くのアートポリス作品を見てまわりましたが、一番好きな作品は山都町にある『鮎の瀬大橋』です。険しい山間部を抜けると突然視界が開け、深い谷をまたぐ大きな橋が現れる。そのダイナミックさに、初めて見たときは胸が震えました。また、橋が地元の人々の生活を劇的に便利にしたこと、橋が皆に愛されていること、それらにも感銘を受け、思わず「自分も橋をつくってみたい」と思っていました。

アートポリスは他の建造物に比べ、建築家の作りたいものがそのまま表現されているような気がします。ですから、見応えのある作品が多いですね。3年生のときに、アートポリス作品の中から10点を選んでレポートを書くという課題があり、八代の保育園や消防署、美術館、三角ターミナルや熊本市の団地などを見てまわりました。どれも形がおしゃれで凝っているなと感じました。中には外観はいいけれど、使いにくいんじゃないだろうかという物もありました。熊本は、有名な建築家の作品を身近なところで手軽に見られるわけですから、建築を学ぶ者にとって、とても恵まれた環境だと思います。

今後は、アートポリスに建築を学ぶ学生も参加できる環境をつくってもらえたらと思います。何らかのかたちでその製作過程に関わることで、学生自身が現場から学ぶものは大きいと思います。

# アートポリス

アートポリス構想が始まって18年。数多くのプロジェクトが実行され、さまざまな人たちがそこに関わってきた。アートポリスに関心を抱き続ける人、そこに住んできた人、計画に参画した人、さまざまな人たちに、今アートポリスに思うことを話してもらった。



## 2階の音が気にならない造り、寒冷地でも暖か

上原 健士さん

南小国町菅杉田団地

中が丸見えだし風やほこりが入りやすいのはちょっと困るかな。建築前に行われたワークショップでは、居住者に高齢者世帯が多いので、高齢者の意見が多く取り入れられたような気がします。一番の問題は、冬は屋内外の気温差で窓の内側のアルミが結露してしまうこと。放っておくとカビが生えるし、手入れが大変です。また、建物を1階と2階に分けるのではなく、どの世帯にも1階と2階があるように縦に分けた方が住みやすかったのではと思います。

でも、この団地がある南小国町は、寒い地域ですが、冬でも暖かく、ストーブ1台で過ごせます。ずっとここに住みたいと思っています。



# Close-up

クローズアップ「建築ガイド」

建築ガイドは、建築の専門家であるアートポリスに理解のある人を対象に県で募集し、現在、建築士などの資格を有する26名が登録している。県がアートポリス視察団体の要望を受けて建築ガイドを紹介することになっている。国内外から多数の視察・見学者が訪れた中で、平成16年度に2回、平成17年度(2月現在)に4回、熊本市と八代市の施設を中心に見学ツアーの案内を行った。

県では、アートポリス建築ガイドが地域に普及することで、視察者だけでなく地域の人々へもアートポリスが周知されていくことを期待している。また、今後は、一般の観光ボランティアにもアートポリスの知識を伝えて案内してもらうことも検討中。また、熊本市以外で視察が多い八代市、山鹿市、山都町などでのガイドを増やすため、地域でのセミナーや出前講座などの実施も考えている。



アートポリスと視察者を結ぶ「架け橋」が誕生

アートポリス参加施設には、毎年、県内外、または海外からも多くの視察者が訪れるが、視察者によりよくアートポリスを理解してもらうため、県では、一昨年から建築ガイドの活用を開始した。



## 「改めてアートポリスを知る機会になりました」

【建築ガイド】岩佐 敏憲さん

平成12年3月竣工のアートポリス作品「一の宮警察署内牧交番」をデザイナーの中尾寛氏と共同設計監理したことがきっかけで、その後も何らかの形でアートポリス事業と関わっていければと思い建築ガイドに登録しました。

昨年11月、韓国の木浦大学建築学科の学生(約45名)一行を案内したのがガイド初体験でした。個人的には韓流ブームの影響もあってか韓国の若者達に親しみを持って接することができ、彼らと楽しいひとときを過ごすことができました。コースは県立美術館分館や北署、県営・市営団地、八代市立博物館などを案内するものでしたが、県立美術館分館と北署については、事前にそれぞれの建築家の方々から設計当時のエピソードなどを教えていただく機会があり、大変興味深く勉強になりました。また案内することによって、私自身も改めてアートポリスの素晴らしさに触れることができ、嬉しく思いました。

## TOPICS

### 海外からの視察者

#### アートポリスへ、海外からも熱い視線

毎年国外から多くの視察が行われるアートポリス。平成9年からこれまで延べ2200人を超える人が熊本を訪れた。今年度は韓国梁山大学、釜山大学、木浦大学などの大学関係者をはじめ、建築関係のツアー、行政関係者など、2月末日現在、熊本県で対応しただけでも343人が来熊。ほかに個人で見学に訪れる例もあり、特に韓国からアートポリスは熱いまなざしを注がれているといえる。中には、建築ガイドの案内を受けた一行もあった。

#### 平成17年度 視察状況

'05, 4/7~8	韓国	韓国行政団体
'05, 5/4~6	韓国	梁山大学
'05, 6/13~18	韓国	天安市職員
'05, 7/4~7	オーストラリア	ゴールドコースト市職員
'05, 7/11~14	韓国	建築関係民間ツアー団体(ICC)1回目
'05, 7/13~14	韓国	韓国行政(文化観光部)
'05, 8/8~11	韓国	建築関係民間ツアー団体(ICC)2回目
'05, 8/22~25	韓国	建築関係民間ツアー団体(ICC)3回目
'05, 9/14	韓国	韓国全羅南道行政職員
'05, 9/29	韓国	建築関係民間ツアー団体(OJT)
'05, 10/13	韓国	光州建築士
'05, 10/24	韓国	国立釜山大学他3大学
'05, 11/9	韓国	木浦大学
'06, 1/18	韓国	ソウル大学教授(報道関係者を含む)
'06, 1/18	韓国	江原道開発公社
'06, 2/10	韓国	(株)ING JAPANツアー団体
'06, 2/10	韓国	Bucheon大学
'06, 2/16~17	韓国	韓国建築雑誌記者、新聞記者

## 第11回 くまもとアートポリス 推進賞表彰

### 外界から遮断されたなかに広がる のびのびした内部空間—「K-house in 近見」

建築やデザインへの県民の皆さんの関心を高め、建築文化の向上を目指して、熊本県内の優れた建造物に贈られるアートポリス推進賞。2005年度は43件の応募があり、推進賞には熊本市の住宅「K-house in 近見」が選定された。「内部界と外部界を遮断する圧倒的な外観と豊かな内部を併せ持つ」ことにより、マンションや大型ショッピングセンターが立ち並びロケーションにあって「周りを気にせず、のびのびと暮らしたい」という施主の望みをかなえたことが、評価につながった。ほかに玉名市の「高瀬蔵」西合志町の「3 Towers」、美里町立中央小学校体育館、「玉名温泉つかさの湯」、菊陽町の「堀田眼科病院」の5作品が推進賞選賞となった。



#### DATA

所在地 / 熊本市近見  
竣工年月日 / 平成17年10月  
用途 / 専用住宅  
構造 / 鉄骨造  
事業主 / 古閑靖浩  
設計者 / 西山英夫建築環境研究所  
施工者 / 株式会社東稜建設

## 受賞紹介 くまもとアートポリスプロジェクト各賞受賞

### 西沢大良氏設計「美里町林業総合センター」 AR AWARD 2005

英国の「The Architecture Review」誌が世界の若手建築家による現代建築を顕彰するAR AWARD2005で、西沢大良氏の「美里町林業総合センター」が大賞を受賞した。林業の町に建てられたこの集会場は、コンクリートを一切使用せず、木材とスティールだけで造られているのが、特徴である。



### AACA賞に白川橋景観整備の設計者・藤江和子氏

AACA賞は、日本建築美術工芸協会が建築と都市の融合性などの優れた業績に贈るもの。2005年第15回となるこの賞に、白川橋景観整備における「フライングライト」などで優れた建築との協働の実績を持つ藤江和子氏が選ばれた。

